

## 黒人言語学史にみる人種主義の変遷

リベラリズム・ディスコース<sup>①</sup>

源邦彦

### アメリカ社会言語学とリベラリズム

本稿のテーマは、今日も都市内部に集住する黒人の大多数が日常言語として用いる黒人言語<sup>②</sup>（一般にアフリカ系アメリカ人英語 (African American English) ある<sup>③</sup>は黒人英語 (Black English) と呼ばれるもの）に対する抑圧の歴史である。二〇世紀中期以降、黒人と白人の共学が始まると（実際はなかなか進まなかったが）、黒人の子供たちは、黒人言語の使用を理由に、あるいはIQテストによって、特殊学級への編入や留年を強制されてきた (DeBose 160-62; Smitherman-Donaldson

90)<sup>④</sup>。とくに本研究が取り扱う一九六〇年代から一九七〇年代にかけては、白人中産階級の言語、文化に基づいて作成されたIQテストによって、特殊学級に通学する黒人学生の割合は白人と比べて異常に高く、教育可能な精神遅滞 (Educable Mentally Retarded) の学生として扱われていた (White 105-13)。言語面では、例えば、テストの指示文で用いられる言語、語彙問題の内容<sup>⑤</sup>が、主として白人中産階級の言語使用に準拠しており (Williams 1975)、白人の言語を使用してこなかった多くの黒人学生のテスト結果が、たとえば精神遅滞児としてみなされる七五点 (サンフランシスコ学区の場合) を下回ったので

ある (White 105-13)。黒人の言語は、心理学や社会学では、先天的かつ後天的にみて白人言語の「発達不良、非論理的言語行為」(Beteier, et al 112-13) として描かれたのである (Williams & Rivers)。これらは、黒人の大多数を二級市民に押し留めるための手段の一つと考えられるが、それと関連して、同時代にパラダイムシフトした言語学が、黒人に対する人種主義に一役を買っていたと言えるかもしれない。

言語学では、一九世紀末から、黒人言語について数々の著作 (eg. Harrison) が人種主義に加担していたのである。しかしながら、一九六〇年代中期以降の黒人解放運動、ブラックナショナルリズムの時代になると、今日の黒人言語学<sup>5)</sup>の主流派に直結する、それまでの差別的な言語学とは一線を画する社会言語学が誕生した。この時代は、アジア、アフリカやアメリカの黒人社会について、アメリカ政府や慈善財団が社会科学に莫大な投資を行う時期で (Smitherman-Donaldson 81)、多くの社会言語学入門的著書が誕生した (井出・金丸)。一九六〇年代、一九七〇年代の社会言語学は、学者個々人のレベルでは言語的平等を達成することを目的としていたかもしれないが、白人優越主義に迎合する論理を提供していたという点では、人種主義の非難を免れるものではない。

本研究では、一九六〇年代、一九七〇年代に誕生したアメリ

カの社会言語学が、黒人言語、ひいては黒人の抑圧の歴史に、どのような役割を演じてきたのかについて論考する。黒人言語学は、黒人と白人とを対等に扱おうとする機運がとくに黒人のあいだで高まり、これまでの白人の地位が脅かされる可能性が出てくるときに、パラダイムシフトする傾向にあった(源)。そのパラダイムシフトの時期にしたがい、黒人言語についての科学的ディスコースの形成過程は、第一期・一八八〇年代～一九三〇年代、第二期・一九四〇年代～一九五〇年代、第三期・一九六〇年代～一九七〇年代、第四期・一九七〇年代～現在に分けられる (Iida)<sup>6)</sup>。本稿は、第三期に新しく生まれたパラダイムの一つ、白人言語学者たちによるリベラリズム・ディスコースが、どのように白人優越主義と関連している可能性があるのかを、利害一致論 (interest convergence, Bell 1980, 2004) の観点から論考する。

## 利害一致論

黒人言語についての支配的な言語学ディスコースの発展は、長きにわたって、白人と黒人の間で執り行われた、「利害一致 (interest convergence)」(Bell 1980) の結果である。 Derrick ク・ベル (Derrick Bell) の「利害一致論は、「人種の平等を

達成するうえで、黒人の利害が調整されるのは、白人の利害に一致するときのみである」(523) という考えに基づく。ただし、黒人の利益が、白人中産・上流階級あるいは白人の優位を脅かさない限りにおいてである。利害が一致したときのみ、表面的かつ漸進的に、黒人の利害が調整される。そして、さまざまな阻害要因のために本質的な変化は起こらないというのが、この利害一致ジレンマの考え方である (Bell 2004)。この利害一致のシステムは、さまざまな科学的論理をもって正当化され、その論理の一つを提供するのが言語学ということになる。言語学を含む社会科学においては、「客観的真実」(……) 存在しない。これらの領域では、真実は支配の目的のために作り出される社会的構築物である」(Delgado & Stefancic 104)。この論理にしたがえば、支配者側が、諸言語に、異なる科学的定義・基準・解釈を与え、その定義・基準・解釈に基づいて、諸集団を、特定の政治経済的地位へと割り当てるのが、この利害一致のシステムということになる。これまで、この利害一致論は、法律学や批判的人種理論 (Critical Race Theory) で活用されてきた枠組みであるが、この理論を言語学の成立過程の批判的分析に援用したい。

### 第三期——白人言語学者による

#### リベラリズム・デイスコース

マーティン・ルーサー・キングJrの暗殺で公民権運動が失速し、かわりにブラックナショナリズムが台頭しだす一九六〇年代後半は、とりわけ、一人のカリブ出身アフリカ系奴隷子孫クレオール言語学者ベリル・ロフトマン・ベイリー (Beryl Loftman Bailey) を除き、合衆国アフリカ系奴隷子孫の社会言語学者は一人もいなかったといっている。この一九六〇年代中期以降は、黒人言語学は社会言語学として最初の隆盛を迎え、官民から莫大な研究資金が、黒人言語研究につき込まれ始めた (Dillard 1973, 265)。このアメリカ社会言語学が興った同じ時代には、黒人の識字能力の問題が、教育心理学者や教育社会学者のあいだで失読症のような欠損や病気として扱われていた (Tabov 1972, 201)。とりわけ、黒人言語は、論理性に欠けた白人言語の発達不全として扱われ、多くの黒人の子供たちが特別クラスへ編入させられたり、精神遅滞児と同じく特殊学級に入れられることで、社会的上昇への道が閉ざされてしまったのである (White)。このような、心理学、社会学における黒人言語に対する人種主義を論駁すべく生まれたこの時代の黒人言語学は、黒人言語が文化的欠陥ではなく体系的で文法を持つこ

とを、半世紀以上を経てようやく言語学的に認めただのである。ただし、その論理は、その使用者に白人社会への平等な全員参加を保証するものではなかった。一九六〇年代中期以降の、白人言語学者たちのディスコースには以下のような共通点があった。

- (一) 黒人言語は文法を持つ体系である (e.g. Baratz 1969; Fasold & Wolfram; Labov 1972; Shuy)
- (二) 黒人言語は非標準語である (e.g. Dillard 1973; Labov 1972; Loflin; Stewart 1967)
- (三) 社会的成功のためには、非標準語である黒人言語ではなく、標準語が必要である (e.g. Baratz 1970; Pederson)
- (四) 黒人言語は、相当なまでに(場合によっては、英語以外の言語と捉えられるまでに)、標準英語と異なっている (e.g. Baratz 1969; Dillard 1967; Fasold & Wolfram; Labov 1972; Loflin; Stewart 1967)

以下、これらの四つのディスコースが各言語学者の発言にどのように現れているかを見てゆく。

まず、この時代の代表的研究であり、アメリカ社会言語学の

先鞭をつけたウィリアム・ラボフ (William Labov) の議論を取り上げてみよう。ここでは、黒人言語を、固有言語ではなく、あくまで、標準語の拡張や逸脱として方言を解釈するための、言語学上の方法論が提示されている。この言語学的手法は、言語間の類似性を強調するのか、相違性を強調するのかという二者択一の問題であり、リベラリズム・ディスコースの場合、前者を選択し言語構造を構築したに過ぎない。この点について、ラボフは以下のように述べている。

数年前まで、言語学者は世界の諸言語の違いを強調し、互いの違いがほぼ限りなく存在すると主張したものである。しかしながら、その反対の流れが今日の言語学では強まっている——諸言語がいかに類似しているか、それらの言語がいかに同様の規則で同じ機能を遂行しているのかに関心が高まっている。(Labov 1969, 40)

このディスコースでは、この動向が言語学内での出来事のように述べられている。しかしながら、このディスコースは、より大きなコンテクストの中で見る必要がある。すなわち、欧米諸国が国家建設をひと段落させ、国家内の分離独立(アメリカであればブラックナショナルリズム)を回避する動きが出てきたと

き、また、アジア、アフリカ、西半球を中心とするディアスポラのコミュニティーが政治的、経済的、文化的主権を求めて戦い始め、それに対して欧米諸国主導の世界秩序を図ろうという動きが強まったときに、欧米諸国の言語と何らかの関連性がある諸言語の自立性、すなわち、相違性・固有性を弱体化する動きが言語学において強まったことに注目しなければならない。

この時代に、類似性に視点を変えた言語学に、多額の研究資金が政府ならびに非政府組織から投じられているのははたして偶然だろうか。その類似性を限りなく強調したのが、このラボフである。この認識に基づいて、黒人言語の言語学的な立ち位置を、ラボフは以下のように説明する。

我々は、非標準英語を〔……〕以下のように見る〔……〕だろう——それ自体で独立したものではなく、英語という大社会言語構造の不可欠な一部をなすものと〔……〕彼ら（黒人学生）の非標準土着語は、大部分の白人非標準諸方言と比べると、標準英語からはるかに遠い関係にあるようだ〔……〕非標準英語は諸規則から成る体系で、標準語とは異なり、しかしながら、コミュニケーションの手段としては必ずしも劣っているわけではない〔……〕我々は、非標準文法の中に、簡素化への一般傾向を観察できる〔……〕非標準黒人英語

(Nonstandard Negro English) は、一部が極端に標準英語と異なり、英語のある一般規則がほかの方言内で機能する環境と頻度をはるかに超えて拡張されてしまっている。これらの拡張の一部は、基底にあるクレオール化した文法に引き起こされたものであるかもしれない、この文法は、複雑な接触状況から生まれたガラ、トリニダード、ジャマイカ、その他の方言にも共有されている。あるいは、その一部については、形態素の簡略化、そして、より分析的な統辞の発達に見られる、「クレオール化」のプロセスで説明がつかかもしれない。しかしながら、これらの発達の方向性に対して、どのような歴史的説明がなされようとも、我々は、英語の方言を扱っているに過ぎず、大局的には、英語内部のほかの発展とはそれほど違わないものである〔……〕標準語と非標準語は表面的には明確な差異が認められるが、それらは両者とも、同じ深層構造に基づいており、同じ深層論理命題を伝達するために用いられている。(Labov 1969, 1, 14, 16, 41, 46-7)

「英語を外国語として教える」というスローガンは、悪しきスローガンであるが、それはまた、悪しき理論的原則に則っている。非標準黒人英語は英語にとって外来のものではない。

(Labov et al. 337)

ラボフの論理は、次のようにまとめられる。(一) 黒人言語は英語の方言である、(二) 黒人言語は諸規則を束ねた体系をなす、(三) これらの諸規則は標準語(白人エリートの言語)にも共有され、標準語を拡張したものに過ぎない、(四) 黒人言語は、白人大衆の用いるどの言語(非標準方言)よりも、白人エリートの使う言語(標準語)とかけ離れている(ただし、他の同時代の学者たちが主張するように外国語に似た存在とは受け止めていない)、(五) 黒人言語の体系の一部は、クレオールと関連性があるかもしれない、そして、上述の引用には含まれていないが、(六) 非標準語としての黒人言語を維持・振興するべきかどうかという重要な点については触れず、「学校の基本的な役割は標準英語の読み書きを教授することである」(Ibid. 4)、と主張する。ラボフの議論で最も重要な点は、黒人言語を体系として認めていることである。すなわち、ことばとしての正当性を認めたという点で、一九五〇年代までの黒人言語の言語としての正当性を否定する方言学ディスコース、同時代の黒人言語を認知的欠陥とみなす心理学的、社会学的ディスコースとは明らかに一線を画す。その一方で、ガラ語、ジャマイカ語など、多くの場合、ヨーロッパ諸語やアフリカ諸語から独立した言語体系、すなわちクレオール語と解釈されるもの

が、英語の「方言」として扱われ、合衆国本土の奴隷子孫の用いる「方言」と同じ連続体上に位置づけられている。すなわち、それらは最終的に標準語へと向かうべき、標準語を単純化した「逸脱形」(ラボフは黒人言語を「逸脱」とは明言せず、標準語の「拡張」「一般化」「進歩」として議論している(Labov et al. 337-8))として、社会進化論的スケールに置かれているのである。一方、このディスコースの問題は、まず、基本的に白人の言語であるものを、政治的中立を装い、「標準語」という用語で指し示していることにある(Smitheman 1972: 85)。さらに、使用することばの特徴に関わらず、平等に門戸を開くことができている白人社会に問題があるにもかかわらず、それを「非標準語」の問題へと転嫁している。また、学校における言語習得が成功するためには、学校外でその言語を用いる機会が豊富にあることが条件として時々指摘されるが(e.g. Cooper 56; Wolfram & Fasold 143)、多くの黒人学生が、学校で接触する白人言語を自然に操れるようになる、とくにその発信能力を習得することは考えがたい(Braun 31)、という側面に十分に注意が払われていない。すなわち、ラボフのディスコースは、リベラリズムの表現や解釈で溢れており、前代のあからさまな人種主義ディスコースを用いてはいないが、大多数の黒人下層階級の言語をある意味否定するその論理は、本質的に

は、大多数の黒人が白人社会へ参加することを可能にすることにはならないのである。

次に、黒人言語のクレオール起源をより強調した論理が、ウィリアム・スチュワート (William Stewart) によって示される。彼は以下のように言う。

一九世紀中期に至るまで、北アメリカのプランテーションの野外労働者であった黒人奴隷のうち、新世界で生まれた多数の奴隷でさえも、ある英語変種、実際は本物のクレオール語——文法構造においてイギリスから直接持ち込まれた諸方言、そして、初期の白人植民者の子孫によって新世界で改造されたことばとは著しく異なっている——を話していた〔……〕今日のアメリカ黒人の非標準ことばは、そのクレオールの構造的形跡を留めているようであり、これがおそらく、黒人の非標準ことばが、部分的に、最も教養のないアメリカ白人の非標準ことば以上に標準英語から逸脱している所以である〔……〕多くの点において、非標準方言を抱えて学校に入ってくる黒人の子供の苦境は、アメリカの学校に入学する外国語話者の子供たちの苦境に似ている。(Stewart 1967, 3, 14)

標準語から「逸脱」したことばとして、黒人言語がより明確に

位置づけられている。社会言語学が主張する、標準方言と非標準方言を対等な方言とみなす論理がいかにも非論理的かがわかる。そもそも「標準—非標準」という関係自体が平等ではない。そこで、非標準白人方言という表現を持ち出す者もいるが、その不平等な関係性が是正されるには至らない。「標準—非標準」という関係は、一般社会でこの知識が消費されるときには、非標準は望ましくないものとして認識されるであらうし、そもそもそのような差別的な表現を科学で用いることの不適切性が問われなければならない。いずれにせよ、文法を備えた言語としての体系性、正当性は認める一方で、非標準言語の使用者として黒人の大多数を二級市民に押し留めておく論理であることに変わりはない。さらに、スチュワートはラポフと同じように、クレオール語を英語変種、すなわち英語の方言として解釈し (cf. Stewart 1964; Dillard 1967)、すべての黒人言語変種を、英語という言語連続体上に位置づけ、黒人言語が英語から独立した固有の体系として成立する道を閉ざしてしまっている。アフリカ系奴隷子孫がネーション (民族) として、固有の言語を有し、政治的に自立する選択肢が奪われてしまっている。一方、非標準白人方言以上に標準から逸脱した、外国語に例えられるような存在として黒人言語を捉えており、科学的基準を柔軟に調整し、白人言語との相違点を強調すれば、黒人言語が英語以

外の言語であるという解釈を可能にするものであるかもしれない。この最後の点においては、ジョエル・ディラード (Joel Dillard) も、スチュワートと同様の議論を繰り返す。

(黒人英語を注意深く調査することで、)一七世紀のイギリス人の言語の特徴、よく比較されるアパラチア方言のような現代の白人諸方言の特徴とは随分異なった深層パターンが見えてくる。より深く、注意深く分析すればするほど、より大きな差異が見つかる〔……〕標準英語で見当たらない語彙は使われていない〔……〕しかしながら、統語分析することで、大きく異なる体系が見出されるのである〔……〕黒人英語基層語 (Basilect)〔……〕の文法は特定のアフロアメリカン諸変種によく似ている〔……〕しかしながら、即決の解決策——奴隷が話したアフリカ諸語から直接の影響を受けたという解釈——はあまりに単純で、奴隷ディーラーが異なる言語使用者を混合したという史実からして、あり得ないものである。(Dillard 1973, 40, 73)

(黒人の)子供の言語体系が、標準英語とは根本的に異なる可能性があるために、標準語教育問題を、第二言語の教育問題として扱い、英語を外国語として教えるために開発された

技術を用いることには大きな意味がある〔……〕(Dillard 1967, 8)

ディラードの論は、以下の五点に絞られる。(一)黒人言語は脱クレオール語化したものである、(二)黒人言語は、英語の方言をなす体系である、(三)黒人言語は標準英語とは著しく異なる、(四)黒人言語は非標準方言、すなわち、標準語の逸脱である(標準語という用語を用いていること自体がこの解釈を暗示)、(五)黒人言語は、言語教育上は、第二言語として取り扱われるべきである、ということになる。黒人言語は、語彙ではなく文法的観点からすれば「大きく異なる体系が見出される」と指摘しているにもかかわらず、決してその絶対的自立性を認めない、つまり、標準英語の逸脱としてしか見なさないという主張は、他の言語学者たちとも共通する。

そして、最後に、黒人言語を英語とは異なる言語だとする解釈を可能にする最も強い主張を取り上げる。それは、マービン・ロフリン (Marvin Loflin) である。ロフリンは言う。

都市言語研究における現在進行中の研究は、非標準黒人英語が多く、点において標準英語と類似しているという考えを肯定し続けている。それにもかかわらず、その音韻的、形態音

素的、助動詞的、変形的構造は、特別な教授法——もっとも効果的であるためには、外国語の教授法に習うべき教授法を必要とするくらい十分に異なっていると思われる。実際、非標準黒人英語の文法を構築しようとする試みから、それと標準英語のあいだにある類似性は表面的なものであることが示唆される。現研究段階において、非標準黒人英語をより完全に記述することで、外国語として扱われるべき文法体系が見出されることが十分に考えられる。(Lotin 1313)

これは、これまでに、主張された中で最も強く、黒人言語の固有言語説を肯定するものである。外国語として取り扱われるべき文法が、黒人言語に見出されるという主張がそうである。もちろん、このようなコンテキストにおいても、黒人言語は、標準英語の逸脱として、非標準英語として議論されるというリベラリズム・ディスコースに変わりはない。

## 利害一致論からの考察

まず黒人側の利害として調整された内容は、言語学における黒人言語が白人言語の誤りであり独自の文法体系は有しないと一八九〇年代、一九五〇年代のステータス、あるいは白人

言語の発達障害であり非論理的言語行為であるという同時代のステータスから、文法を備えた体系として認められたということが最も大きな点であった。その一方で、白人側の利害としては、黒人の言語行動が白人の言語行動とある意味平等であることを認め、それを黒人英語として、白人言語の拡張や派生物として、英語(白人言語)という社会言語構造の一部分としての差異、固有性を認めたのである。これによって、国内外の黒人と第三世界へアピールすることができたということが考えられる (cf. Dudzian)。以上のように、白人と黒人の利害が一致することになったが、あとは、白人エリートの優位を保つことが条件となるので、白人エリートの言語である標準英語に対し、黒人言語を非標準英語と位置づける、つまり黒人言語を白人言語の逸脱として位置づけ、黒人言語ではなく白人言語でのみ白人社会に参加できることを可能にすることで、黒人の多数を二級市民に押しとどめておくことを同時に成し遂げたのである。前時代と比べあからさまに人種主義的な、生物学的な表現は用いられず、より巧みな言い回しが用いられる新人種主義の時代が始まったといえよう。この最後の点に関しては、一九七三年、言語学、心理学、コミュニケーション学を専門とする黒人グループが抗議の声明文を出し、“substandard” “urban Negro dialect” “Negro non-standard English” “Negro dialect” “Black

English”という名称を“Ebonics”に改称し、黒人言語が英語とは異なるアフリカ系の固有言語であるという主張を行っている (Minamoto 208-11)。この抗議運動は、その後の黒人言語学ではほとんど受け入れられることはなく、現在も六〇年代、七〇年代のリベラリズム・ディスコースが支配的となっている。

これと関連して、各研究が黒人言語が外国語と呼べるほど白人言語と異なっていると言及しながらも、黒人言語を英語以外の言語とは位置付けなかったことに触れておきたい。万が一、黒人言語が英語以外の言語として独立した地位を与えられれば、初等中等教育法第七条二言語使用教育法 (Bilingual Education Act of 1968) の適用により、子供たちの母語の維持に加え、英語の習得も促進されたかもしれない。場合によっては、ブラックナショナルリズムを刺激し、自治権要求や分離独立運動、奴隷制に対する補償運動への一助となっていた可能性がある。これは、白人社会への統合を目指す公民権運動派を擁護し分離独立を目指すブラックナショナルストを敵視する当時の政府には、到底受け入れられない結果である。合衆国政府は、殊に非ヨーロッパ系のマイノリティーに対しては容赦ない英語同化政策を採るナショナルストイデオロギー (cf. Crawford) を有しているが、このリベラル派言語学者たちは、同様のナショナルスト

的イデオロギー (語彙のほとんどが英語であるが文法的には大きく異なる合衆国内の諸言語を、英語との類似性を強調することで英語の二級方言として解釈する見方)、帝国主義的イデオロギー (語彙のほとんどが英語であるが文法的には大きく異なる合衆国外の諸言語を、英語との類似性を強調することで英語の二級方言として解釈する見方) を受け入れていたという点で、興味深い一致を見せる。彼らは、世界中の例から、方言と呼ばれることが、独立した固有言語として扱われる可能性があることを知りながらも、また、おそらくはそのような固有言語として認められることが当該言語を用いる集団の人権保護と深く関係していることを知りながらも、それにあえて言及しなかった。このように、黒人の言語を白人の言語と同じく言語としての正当性を有すると譲歩しながらも、つまり、表面的な改善は施されながらも、非標準語として黒人言語を第二級のステータスに押しとどめ白人エリートの言語である標準語を上位に置くというやり方が、そして黒人言語のみを主に用い白人言語の発信能力には到達しない多数の黒人を第二級市民に押しとどめるというやり方が、まさに、デリクベルのいう利害一致ではないだろうか。

- (1) 本研究は「源 (2018)」と同じく、Bell の利害一致論 (interest convergence) の枠組みで、黒人言語に関する言語学研究的歴史を、批判的に再考しようというものである。前研究は、一八八〇年代から一九五〇年代までのディスコースの変遷を扱っている。
- (2) 本稿では、黒人の大多数が日常言語として用いることばの呼称として、「黒人言語」を使用する。これは「Duncan の用法『black language』を翻訳借用したもので、黒人の言語を英語の方言あるいは英語とは異なる言語とは判断しないための、言い換えれば、どちらの定義とも解釈できる用法である。
- (3) 筆者が、二〇一三年の夏、南ロサンゼルスのある学区の特殊学級の教員にインタビューを行った際、アフリカ系アメリカ人が特殊学級に編入させられる主な理由は、「スピーチ (speech)」と「勉強に取り組む態度 (academic attitudes)」であった。彼女は、それらの理由について仔細に語ることは無かったが、それら二つのカテゴリーは、ドゥボーズ (DuBois) が、その理由として取り上げる「スピーチ障害 (speech pathology)」ならびに「学習障害 (learning disorders)」と興味深い一致を見せる。これは、現在も以前と同じような理由で黒人学生が特殊学級に編入させられている可能性を示唆している。この問題が先鋭化した最近の事象として、カリフォルニア州オークランド市教育委員会が一九九六年に可決したエボニクス決議がある。異常な割合の黒人学生が特殊学級に編入させられ、その打開策
- の一つとして、黒人学生の第一言語が西アフリカを起源として持つエボニクスとして定義されたのである。
- (4) 黒人の子供に 'dust' という語の意味を尋ねると、その黒人の子供は、黒人の文化的フレームワークで 'honey' と回答する。白人文化に準拠したウェブスターの辞書では 'fine, powdery particles of the earth' と定義されており、この IQ テストでは不正解となるが、たとえば、黒人ロッキンニチヤーでは 'The dude had big dust.' という 'The person had a lot of money.' を意味しつづる (White 109)。このような考え方に基づき、黒人文化に準拠した IQ テストと比べ、'Black Intelligence Test of Cultural Homogeneity (BITCH)' が、IQ テストの結果ゆえに大学進学を一度は諦めた (Prof. Robert Williams)、『ワシントン大学 (セントルイス) 心理学名誉教授ロバート・ウィリアムズによって開発された (cf. Williams 1972)』。
- (5) 黒人言語学とは、'Black Linguistics' の翻訳であり、黒人言語についての言語学的研究のことを意味する。
- (6) 各時期のディスコースは、明確な境界線を設定できるものではなく、各時期をまたいでグラデーションをなしていることによって。
- (7) ファニータ・ウィリアムソン (Juanita Williamson) は、この時代の合衆国奴隷子孫の言語学者であるが、彼女は方言学の専門であり、黒人言語という固有の体系の存在を否定している (cf. Williamson)。

- Baratz, Joan C. 1969. "Teaching Reading in an Urban Negro School System." Eds. Joan C. Baratz and Roger W. Shuy. *Teaching Black Children to Read*. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics, pp. 92-116.
- . 1970. "Educational Considerations for Teaching Standard English to Negro Children." Eds. Ralph W. Fasold and Roger W. Shuy. *Teaching Standard English in the Inner City*. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics, pp. 20-40.
- Bell, Jr., Derrick A. 1980. "Brown v. Board of Education and the Interest Convergence Dilemma." *Harvard Law Review* 93 (3): 518-34.
- . 2004. *Silent Corenantis: Brown v. Board of Education and the Unfulfilled Hopes for Racial Reform*. New York: Oxford University Press, 2004.
- Bereiter, Carl, Siegfried Englemann, Jean Osborn, and Philip A. Reidford. 1966. "An Academically Oriented Pre-School for Culturally Deprived Children." Ed. Fred M. Hechinger. *Pre-School Education Today: New Approaches to Teaching Three-, Four-, and Five-Year-Olds*. Garden City, NY: Doubleday, pp. 105-37.
- Cooper, Robert L. 1989. *Language Planning and Social Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crawford, James. 1993. *Hold Your Tongue: Bilingualism and the Politics of "English Only"*. Reading, Mass.: Addison-Wesley. ( = ローフォード, ヒュートクス 一九九四年『移民社会アメリカの言語事情——英語第一主義と二言語主義の戦い』本谷信行訳) The Japan Times)
- DeBose, Charles E. 2005. *The Sociology of African American Language: A Language Planning Perspective*. New York: Palgrave Macmillan.
- Delgado, Richard, and Jean Stefancic. 2012. *Critical Race Theory*. Second Edition. New York: New York University Press.
- Dillard, Joey L. 1967. "Negro Children's Dialect in the Inner City." *The Florida FL Reporter* 5 (3): 7-8, 10.
- . 1973. *Black English: Its History and Usage in the United States*. New York: Vintage Books.
- Duncan, Garrett Albert. 2007. "Cultural Imperialism, Black Culture and Language Research in the United States." Ed. Shi-Xu. *Dis-course as Cultural Struggle*. Hong Kong: Hong Kong University Press, Kindle Edition.
- Dudziak, Mary L. 2002. *Cold War Civil Rights: Race and the Image of American Democracy*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Fasold, Ralph W. and Walt Wolfram. 1970. "Some Linguistic Features of Negro Dialect." Eds. Ralph W. Fasold and Roger W. Shuy. *Teaching Standard English in the Inner City*. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics, pp. 41-86.
- Harrison, James A. 1884. "Negro English." *Anglia* 7: 232-79.
- 井出祥十・金丸扶美 一九八六年「欧米の社会言語学の動向——二つのジャーナルの分析から」『日本語学』五(一一): 八五—九八頁。
- Kurath, Hans. 1949. *A Word Geography of the Eastern United*

- States. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.
- Labov, William. 1969. *The Study of Nonstandard English*. Urbana Champaign, IL: National Council of Teachers of English, by special arrangement with the Center for Applied Linguistics.
- . 1972. *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Labov, William, Paul Cohen, Clarence Robins, and John Lewis. 1968. *A Study of the Non-Standard English of Negro and Puerto Rican Speakers in New York City*. Research Project No. 3288. Volume I: Phonological and Grammatical Analysis. US. Department of Health, Education, and Welfare, Cooperative. New York: Columbia University.
- Loflin, Marvin D. 1967. "A Teaching Problem in Nonstandard Negro English." *The English Journal* 56 (9): 1312-14.
- 源邦彦 二〇一八年「黒人言語学史における人種主義の変遷(1880年代～1950年代)——利害一致シロントンの「考察」黒人研究 八七：六七～七六頁。
- Mimamoto, Kunihiko. 2017. "Ebonics and Dr. Ernie Adolphus Smith—Toward a Comparative and Holistic Paradigm in Black Linguistics." Doctoral Dissertation Submitted to African American and African Studies, Michigan State University.
- Pederson, Lee A. 1964. "Non-Standard Negro Speech in Chicago." *Non-Standard Speech and the Teaching of English*. Ed. William A. Stewart. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics. pp. 16-23.
- Prof. Robert Williams Has Written An I. Q. Test for Blacks That Isn't Jive. *People*, November 07, 1977. Accessed October 3, 2018 at <https://people.com/archive/prof-robert-williams-has-written-an-i-q-test-for-blacks-that-isnt-jive-vol-8-no-19/>.
- Shuy, Roger W. 1969. "A Linguistic Background for Developing Beginning Reading Materials for Black Children." Eds. Joan C. Baratz and Roger W. Shuy. *Teaching Black Children to Read*. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics. pp. 117-37.
- Smitherman, Geneva. 1972. "Black Power is Black Language." Eds. Gloria M. Simmons and Helene D. Hutchinson. *Black Culture: Reading and Writing Black*. New York: Holt, Rinehart and Winston. pp. 85-91.
- Smitherman-Donaldson, Geneva. 1988. "Discriminatory Discourse on Afro-American Speech." Eds. Geneva Smitherman-Donaldson and Teun A. van Dijk. *Discourse and Discrimination*. Detroit: Wayne State University Press. pp. 144-75.
- Stewart, William A. 1964. "Foreign Language Teaching Methods in Quasi-Foreign Language Situations." Ed. William A. Stewart. *Non-Standard Speech and the Teaching of English*. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics. pp. 1-15.
- . 1967. "Continuity and Change in American Negro Dialects." *The Florida FL Reporter* 6 (1): 3-4, 14-6, 18.
- White, Joseph L. 1984. *The Psychology of Blacks: An Afro-American Perspective*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, Inc.
- Williams, Robert L. 1972. "The BITCH-100: A Culture-Specific Test." St. Louis, MO: Williams and Associates, Inc., 6374 Delmer Blvd. St. Louis, Mo. 63130.
- . 1975. Ed. *Ebonics: The True Language of Black Folks*. St. Louis, MO: Robert L. Williams and Associates, Inc., pp. 96-109.

Williams, Robert L. and L. Wendell Rivers. 1975. "The Effects of Language on the Test Performance of Black Children." Ed. Robert L. Williams. *Ebonics: The True Language of Black Folks*. St. Louis, MO: Robert L. Williams and Associates, Inc., pp. 96-109.

Williamson, Juanita V. 1975. "A Look at Black English." Ed. Robert L. Williams. *Ebonics: The True Language of Black Folks*. St. Louis,

MO: Robert L. Williams and Associates, Inc., pp. 11-21.

Wolfram, Walter A. and Ralph W. Fasold. 1969. "Toward Reading Materials for Speakers of Black English: Three Linguistically Appropriate Passages." Eds. Joan C. Baratz and Roger W. Shuy. *Teaching Black Children to Read*. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics, pp. 138-55.

(みなもと くはひこ／青山学院大学)